



争わないチカラ

永田 円了

Interbeing

自分に自信があればあるほど、いや逆に劣等感が強ければ強いほど、人は頑固に自分の意見を押し通そうとする。相手とぶつかって失うエネルギーを物ともせず、争いの世界に突入する。果たして、それで得た勝利はどれだけの価値があるのだろうか。

争わないチカラ、があるとするとするならば是非学んでみたい。相手のコートを無理矢理脱がせようと、北風が頑張れば頑張るほど、ガードが堅くなり、しかし太陽が暖かい日差しで相手を照らすなら、旅人は自らすすんでコートを脱ぐ。イソップ物語「北風と太陽」では、闘わないチカラの威力をみごとに物語っている。

ディベート vs. ダイアログ

米国の影響か、我が国日本もディベートが根付きつつある。裁判でのディベート、政治でのディベート、対立を前提とした理論優先の意識が日本文化の粋を浸食し始めている。対立（ディベート）によるアウフヘーベン（高次の思考）が実現できれば、その争いは素晴らしい実りのあるものになるであろう。しかし、現実には、対立がその高次のレベルまでに達する前に闇の世界に入ってしまう。



一方ダイアログでは、対立ではなく、傾聴、対話によって1足す1が10にも100にもなりえる創造的なコミュニケーションが可能となる。ソクラテスとプラトンによる対話、勝海舟と坂本龍馬とのダイアログはまさにその域を物語っている。

インタービーイング Interbeing



ティク・ナット・ハン

全てのものは繋がりをもって存在する。一枚の紙切れの中に雲が見えるか、とベトナムの高僧ティク・ナット・ハンは問う。紙と雲の関係、雲が存在するから雨が降る。雨が降れば大地が潤う。大地が潤うと、紙の材料である木々が萌える。この関係性なしに一枚の紙切れの存在を語ることはできない。全てが必然的な関係をもってそこにあり、何一つ単独で存在するものはない、という考えである。

一枚の紙のうらおもて、裏を取り除いて表はありえない。では、争いの中での敵の存在は何か。敵と味方の関係は、まさに紙のうらおもての関係と同様である。敵がいるから味方がいる。その逆もしかり。であるなら、敵と味方はインタービーイング（相互共存）の関係であることが分かる。

相互共存の意識、この意識をもって人生を歩めば、争う気持ちは起こりようがない。敵味方というコトバすら色あせ、相互のエネルギーの花が色づきはじめるのではないか。

<事例 DVD等>

NHK きわめびと／女芸人トリオ／争わないチカラ
坂本龍馬と勝海舟／ディベート vs. ダイアログ、対話へ
映画「ジェーン・エアー」／許して、自立へ
55歳からのハローライフ「結婚相談所」／女性の自立
木下恵介監督／敵を愛しなさい
ティク・ナット・ハン／闇と光はカップル同士、インタービーイング
歌・ルイ・アームストロング／ What a wonderful world

円了のホームページ：www.enryo.jp

